# ガクガク科学

てせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガクガク科学

【Ｎコード】
Ｎ１９８０Ｚ

【作者名】
てせ

【あらすじ】
悪の科学者の様々な発明。
それは良いものなのか、悪いものなのか。。。

**（前書き）**

初投稿です。
暇な時に考えたものです。
文章力が低いですが、暇つぶしに読んでいただければ嬉しいです。
よろしくお願いいたします。

【もしも、翼を授ける飲み物を開発してしまったら編】

ある科学者の男がいた。

彼はお金に困っていた。

彼は今までいろんなものを開発してきた。

「冷たい炎」

「ちょっとそこまでドア」

「飲めない水」

「ナメクジを塩で殺すという残酷な方法」

技術力はあるもののそれはすべてくだらない物で、ブームは一瞬のものであった。

彼はふと昔のＣＭを思い出した。

「そうだ、次は翼を授けるような飲み物を開発しよう。今の技術と私の力を組み合わせれば可能なはずだ。」

彼は頑張って考えた。そして開発に力を注いだ。

彼はお金のためなら何でもする最悪な男。

【実験】

○試作品1・ネズミに使う（ただ変化を試すため）

結果・ふわふわした毛が生えてきた。失敗。

彼は一発目を快く引き受けてくれたネズミに敬意を表し、ハムスターと名付けた。

○試作品2・小さな「もの」に使う（翼が生えるか試すため）

結果・翼ではなく小さな羽は生えたが、弱ってしまった。失敗。

翼が生えたことに、彼は天から授かった奇跡と喜び、小さな「もの」に天使（子）と名付けた。

しかし、同時に自分の実験のために大事なものを失った悲しみに嘆いた。

○試作品3・スズメに使う（翼が大きくなるか試す）

結果・体が大きく変化したが、飛べばなくなった。おかしな生物の完成。失敗。

彼は試作品２の事もありストレスで怒り狂い、その鳥を名前も付けずに寒い地域に持って行った。

一か月後

○試作品４・自分に使う（今までの実験から確実に翼が生えると確信したため）

結果・少々生えるまで時間がかかったが、しっかり生えた。そして飛べた。成功。

彼は喜んだ。そして売るための準備をした。

しかし翼が生えているのは１日。これはどんな研究をしても彼の力では変えることはできなかった。

２週間後

天気予報・晴れ

○完成品・客に使う（試作品４に翼が生える時間を設定したもの。明日の朝８時に生える設定。）

彼は売りに出た。

彼が作るものはくだらないものばかりだったが、一瞬のブームは必ず起きていた。

そのためもあり、彼は一応有名科学者であった。

彼は客には優しい。なぜか信頼もあった。しかし本性は最悪な科学者であった。

人口増加が問題な時代。人口削減計画が考えられているほどのもの。

売る場所はもちろん、歩くのも大変なほどたくさん人がいる都会。

思い通りに売れた。すごい勢いで売れた。

すぐに用意していた１０万個は完売した。

バカ売れバカ儲け。

彼は喜んだ。

そしてそのお金で遊び歩き、また売る分を残りのお金でニヤニヤしながら作った。

次の日の朝７時５０分

通勤ラッシュ。

その日は快晴で飛ぶには絶好の日。

その日も昨日と同じく、歩くことも難しいほどの人がそこにはいた。

まだかまだかと科学者、会社に行くもの、学校へ行くものたち購入者は待ち望んだ。

なぜか科学者を疑うような者は誰1人いない。

7時59分59秒

○完成品・結果

その日は快晴だった。

飛ぶには絶好の日。

しかし、それは7時59分59秒までのことであった。

朝8時に事件は起こった。

【朝8時】

時間通りに翼が生えた。

科学者は成功したと思った。

人々は翼が生えたことに喜び叫んだ。

「鳥のように空を飛びたい。」

一度は誰もが夢見たこと。

彼らは一斉に飛び立った。

１０万人が一斉に。

「一列に飛びなさい、しっかり空の道を飛びなさい、速度を守りなさい」

そんなルールは現代にはない。

そう、当たり前に１０万人が一斉に「自由」に飛ぶ。

そこにはあり得ない光景が広がった。

科学者は自分の事しか考えない最悪な人。

そこまで考えていた人は１人もいなかった。

人々は飛んだ。周りの人々を押しのけ広いところを求めて。
誰もあきらめない。戦う。一度見た夢のため。
しかし、歩くのも難しいほどの人々１０万人＋大きな翼。
そんな場所があるはずもない。いくら「空」でも。

その日は快晴だった。
そう、それは7時５９分５９秒まで。

朝8時を少し過ぎた。
暗黒の空。血の雨。
１０万人の人々と翼のせいで、太陽の光が届かなったその地。
そして降り注ぐ血。
雨か血か汗か区別がつかないほどの暗さ。
その日、天気予報氏は誰もその地の天気を、完璧に当てることができなかった。

【朝１０時】
光が戻った。

しかしその地にあったのは、勝者の飛ぶ光景、倒れる多くの人々、血の地。

科学者の実験はまた失敗した。しかし、また一瞬のブームは起きた。

科学者はひそかに作っていた記憶を操る電波で、自分の信頼を取り戻した。

なぜこれを売らないのか？何故これを公表しないのか？

そう、彼は最悪の科学者だ。

公表なんかしてしまうと自分意外も使用可能になるし、自分に使われるかもしれない。

だから、自分自身だけのものにした。

人を操つって発明品を売るを繰り返す。

でも、一度失敗した発明品はもう売らない。

いくら売れた失敗作でも。

科学者にも科学者なりのプライドがあるから。

【その日の正午】
科学者は肩を落としていた。

「あー。。。いつもこれだ。。。」

科学者はまたお金が無くなった。

売れ残りの山。

やはり悪という文字がある限り、貧乏からの逆転劇というものは無い。

（終わり）

## （後書き）

駄文失礼しました。　読んでいただきありがとうございました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1980z/

ガクガク科学

2011年12月7日02時51分発行